戦場のアリア

あるかでぃあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦場のアリア

【Ｎコード】
Ｎ７９０３Ｇ

【作者名】
あるかでぃあ

【あらすじ】
この世界とは異なる世界。人と魔物が、剣と魔法が支配する世界で、伝説と呼ばれる傭兵。曰わく、素手でドラゴンを葬るとか。または、一人で一国を滅ぼすと言われる傭兵。だが、その正体は……ゴスロリ美少女だった！！！

第一小節：戦場の少女（前書き）

初投稿作品です。
拙い文章力ですが、最後までお付き合い下さいませ。

第一小節：戦場の少女

鋼と鋼がぶつかり合い、甲高い音と火花が飛び散る。

片や両刃の戦斧（バトルアクス）。

片や幅広の刀身を持つ巨大な剣（クレイモア）。

しかし、それを打ち合う二つの影は互いの得物の重量を感じさせない程の攻撃を繰り出している。

戦斧はその風圧だけで、その場のすべてを薙ぎ倒すような凄まじい攻撃で。

巨剣は鋭く、まるで羽でも振り回すようなスピードで、攻撃を繰り出しあう。

しかしぶつかり合う二つの影は、まったく正反対の人間と亜人であった。

戦斧を振るうのは、筋骨隆々の巨大なオーガ。

食人鬼とも呼ばれる、3メートル前後の凶悪な亜人。

そして巨剣を振るうのは、なんと少女であった。

年の頃は十代前半ほど。

腰まで伸ばした美しい金髪（ブロンド）をツインテールに纏め、その体を包むのは黒を基調にレースをふんだんに使った服。
所謂（いわゆる）ゴスロリファッションである。
とてもでは無いが、戦場に出るような出で立ちでは無い。
ましてや巨剣を扱って凶悪なオーガと闘う事など、その華奢な体では不可能なハズである。

しかし少女はオーガと互角に闘っている。

いや、互角以上に。

オーガの巨体には少なからず刀傷が付いているのに対し、少女の体には傷どころか衣服に泥一つ付いてはいない。

オーガの周りをウサギのように跳ね回りながらである。

「ＧｕＯｏｏｏＮｎ！！！」オーガが魂を砕かんばかりの怒りの雄叫びを上げる。

それに対し、少女はつまらなそうに

「……飽きたわ」

と呟くと、巨剣を一閃させる。

「ＧｕＯｏｏ……」

オーガは断末魔の声を上げて崩れ落ちる。

戦場に、また一つの屍が横たわった。

残っているのは、少女とゴブリンと呼ばれる豚と人とを掛け合わせたような亜人が一体だけだった。

「……そんな…オーガが、手も足も……。テメェは、いったい……。」

ゴブリンは、それ以上言葉を口にする事は出来なかった。

「アリア、傭兵のアリアよ」

戦場には、もう少女以外に生きている者は居なかった。

第一小節：戦場の少女（後書き）

短い第一話でしたが、いかがでしたでしょうか？
御意見、御感想等頂けると嬉しいです。

第二小節：港町アルマダ（前書き）

第二話です。
まだまだ拙い文章ですが、どうぞお付き合い下さい。

第二小節：港町アルマダ

「いや～、助かりました。それにしても、お強いですね～」

恰幅の良い中年男がアリアに笑いかける。
ここは辺境の港町『アルマダ』に向かう街道の途中の森の中。
前回の闘いから一週間程が経っていた。
アルマダに行く予定の有ったアリアは、ついでに商人の護衛をしているのである。

「まぁ、一応傭兵ですので。野党ぐらいは…ねぇ」

そう応えながら、今回の雇い主の男に微笑みかける。
完璧な営業スマイルなのだが、そこはアリアの容姿である。
上手くすれば、帰りの車の心配も無くなるだろう。
この時代、乗り物と言えば馬車が主流ではあるが、徐々に自動車も普及しつつある。

話がそれてしまったが、ともかく先程襲ってきた野党達を軽くあしらったアリアに対して、雇い主は大満足だった。
しばらく雇い主と話しをしていると、不意にアリアの頬を潮風が撫でる。

「わぁ」

年相応の少女のような笑みを浮かべ、アリアは眼前に広がる青い海に喜びの声をあげる。
街道は緩やかなカーブを描(えが)きながら、海沿いを続いていく。

「アリアさん。アルマダが見えてきましたよ」
男の声に、街道の横に広がる海を見ていたアリアは顔を前方に向け直した。
巨大な港を擁(よう)する大都市が、アリア達を迎えているようだった。
「有り難うございましたアリアさん。またお願いします」
「こちらこそ。宜しくお願いしますね」
アリアは商人に別れを告げると、ギルドへと足を向けた。
ギルドは傭兵への仕事の紹介や、現在位置の把握などを行(おこな)っている為、他の地方に移動した時には必ず報告しなければならない事になっている。
もっとも、アリアは今回アルマダで発注された依頼を受けるつもりで来たので、両方の用事で向かっているのだが。
アルマダのギルドは煉瓦造りの立派な二階建てである。
アリアは、まず二階の『現在位置報告係』通称『現置係』へと向かった。
ドアを開けると、周りの者達が奇異な目を向けてくるが、アリアは気にせず中に入って行く。
傭兵しか来ない所に、少女が入って来たのだから当然である。
それも、どこかの令嬢のような出で立ちなのだから。
アリアはそんな周囲の反応には慣れているのか、一直線にカウンターまで進むと
「現在位置報告に来たわ。」
と、係員の女性に告げた。
すると、部屋の奥のデスクで居眠りしていた眼帯の男が目を覚まして

「よう、アリアちゃんじゃないの。久し振りだな～」
と声をかけてきた。
「シュルツ……。まだクビになってなかったのね」
シュルツと呼ばれた男は肩を竦(すく)めながら
「俺みたいにユーシューな男が、クビになんかなるわけ無いでしょ～？」
と、『心外だ』と言いたげに応えると、奥の応接室へと手招きする。部屋に入ると、テーブルを挟んで二人は向かい合わせにソファーに座る。
「しっかし、ホントに久し振りだな～。まだ生きてるなんて思わなかったぜ」
「わたしが、そう簡単に死ぬわけ無いでしょ。それとも、思い出させて欲しいのかしら？」
そう言われるとシュルツは、たまらんな～と言いながら左目を覆う眼帯を掻く。
「それよりも、わたしがココに来た理由はわかっているんでしょう？」
アリアがそう言うと、シュルツの雰囲気が変わった。
先程までの飄々（ひょうひょう）としたものから、歴戦の戦士の雰囲気に。

「一応…な。此処から半日ぐらいの所に有る、漁村と最近連絡が取れなくなってる。それに、妙な魔物を見たって報告もな……『異人』だろう」
「で、反応は？」
「…有ったよ。馬鹿でかい『魔法陣』の反応だ」
それだけ聞くとアリアは立ち上がり、ドアへと向かう。
「アリア。今回はヤベェぜ？『異人』の目撃例が多すぎる」
ドアを開けようとするアリアの背にシュルツが声をかける。
アリアは振り返り微笑みかけると
「それでも…行かなくちゃ。わたしには、それしか無いんだから」
……アリアが出て行った部屋の中でシュルツは煙草に火を点ける。
「それしか無いなんて…。寂しいこと言うなよ、アリア」
吸い始めたばかりの煙草を、シュルツは苛立たしげに揉み消した。

第二小節：港町アルマダ（後書き）

如何でしたでしょうか？
前回よりも少し長めに書けましたよ（笑）
これからも宜しくお願いします。

第三小節：少女と少女（前書き）

第三話です。
よろしくお願いします。

第三小節：少女と少女

アリアは現置係を出ると、そのまま一階の斡旋係へと向かった。
斡旋係の前には小さなホールが有り、仕事を探しに来た待つ者や終了の報告に来た者、また暇を持て余した者など様々な傭兵達が思い思いに過ごしていた。
その中を係員の居るカウンターに行こうとするアリアに誰かが声をかけてきた。

「あんた…、アリア？」

その声を聞いて相手が誰なのか判(わか)ったのか、アリアは足を止めた。
しかし、その表情は憎々しげに歪んでいる。

「ちょっと、アリアなんでしょ？」

再び話しかけてくるがアリアは、まるで気づいていないように歩き出す。

「ちょっと！ねぇってば、アリア！！！」

相手は、なおも話しかけてくるが、アリアは無視して進み続ける。

「無視してんじゃ無いわよ、この貧乳！！」
「なっ！？」

いきなりそんな事を言われて、アリアは赤面しながら振り向いて相手を睨み付ける。
彼女の前に立っているのは、革で出来た軽鎧（『ライトレザーアー

マー』と呼ばれる物）を身に付けた少女であった。
年の頃は、アリアよりも少し上の１５歳前後。
系統は違うが、アリアに劣らない美少女であった。
アリアの雰囲気を名家の令嬢と例えるならば、もう一人の少女は野生の猫科の動物のような印象を見る者に与えた。
因(ちな)みに胸は二人とも年相応なので、それ程たいした違いは無いのだが……。

「いきなり失礼な事言わないでよ『リディア』！！」

アリアは、『リディア』と呼んだ少女に向かって言い返す。

「それに、わたしの胸はまだまだ成長期なんだから！！あんたみたいにお先真っ暗じゃ無いのよ！！！」

と言い放つ。
因みに『ビシッ！』とばかりに突き出した人差し指が指す位置は顔ではなく、もう少し下の方である。

「なっ！？なぁんですって～～～！！！」

屈強な傭兵達が『生暖かい目で』見守る中、美少女二人の恥ずかしい言い争いはしばらく続くかと思われた。
が、鋼で出来た大鎧(プレートメイル)を着込んだ一人の大男が二人に近づいて行き

ゴッッ！！！

ガンッッッ！！！

と不意に終わらせた。

アリアとリディアは痛む頭を押さえながら、乱入者を上目遣いで睨み付ける。
因みに、二人ともナミダ眼だ。

「いった～～い」
「なんでアタシもなのよ～『ゴルド』」

二人は口々に不平を漏らす。しかし、リディアにゴルドと呼ばれた大男は気にした風も無く

「け、喧嘩両成敗だよ、リディア」

と応える。
少しドモッてしまったのは、この男なりに動揺しているからだろうか。
しかし、表情には殆ど変化が見られない。

「いたたた…。久し振りね、ゴルド。まだ、こんなのと一緒に居たんだ」

アリアは頭をさすりながら、大男に右手を差し出す。

「あ…、うん」

少し赤くなりながら、ゴルドは差し出された手に応じるように握手する。
アリアのような美少女に握手を求められれば、赤面しない男は少ないだろう。
だが、彼が赤面している本当の理由がそんな事では無い事はアリアだって解っている。

なにしろゴルドは握手しながらも、チラチラとリディアの方を見ているのだから。
もっとも、とうの本人である少女は、まったく気づいていないのだが。

「こんなのってなによ、こんなのって！！」

リディアが再びアリアに噛みつくが、ゴルドが両手を上げ始めると黙り込んでしまう。
代わりにゴルドを上目遣いで睨み付ける。
ゴルドは困ったような表情で「あ…」とか「イヤ…」とか言っている。
見かねたアリアは、溜め息をつきながら助け舟を出してやる事にした。

「どうでも良いんだけど…。あなた達も依頼を受けに来たんじゃ無いの？」
「あ、そうだったわ。行こう、ゴルド」

ゴルドの手を引きながら、リディアはカウンターに向かって歩き出した。
明らかに先程よりも顔を赤くしながら、彼は引っ張られていった。
まったく、解りやすい青年である。
やれやれといった感じで、アリアは再び溜め息をつくと、自分もカウンターへと向かった。
アリアはシュルツに聞いた漁村の調査依頼の受注申請をすると、ホールに戻り手続きが終わるのを待つ事にした。いつの世も、お役所仕事とは時間がかかるものだ。
暫(しばら)くすると、リディアもホールに戻って来て、アリアの座るテーブルへとやって来た。

喧嘩するほど仲が良いとは言うが、二人の少女の関係もそういったモノなのだろうか。

「あぁぁ…。この待ち時間って、なんとかならないのかしらねぇ」
「仕方ないでしょう。お役所仕事なんて、そんなモノなんだから」

来るなりグチりだすリディアに、アリアは『諦めた』といったように答える。

「そうなんだけどさぁ～。ヒマなんだも～～ん」

リディアは溶けたようにテーブルに突っ伏すと、気怠(けだる)そうにイヤイヤする。
まるで『縁側でゴロゴロする猫』である。

「も～、あなたのダラダラした感じが伝染するでしょ～」

とうとうアリアもグッタリとテーブルに突っ伏してしまう。
テーブルに突っ伏して、ウダウダとしている美少女二人…。
……かなりシュールである。

「…二人とも、何してるの？」

遅れてやって来たゴルドは、二人の様子を見て首を傾(かし)げる。

「「ヒ～マ～な～の～～」」

二人は声を合わせて答える。
やはり仲が良いのであろうか…。

「まあまあ、二人とも。これでも飲んで待っていようよ」
と、ゴルドは冷たい飲み物を差し出す。
「ありがとう、ゴルド」
「さんきゅ～」

口々に礼を言いながら、飲み物を受け取る二人。
アリアはグレープジュース。リディアは牛乳である。
年の割に伸び悩んでいる身長を、リディアは気にしているのだ。
なにしろ、三年ほど年下のアリアと殆ど変わらないのである。
それに、胸の成長にも良いらしい。
乙女心は複雑なのである。
因みにゴルドはビール。
いくら飲んでも酔わない『酒豪』である。

しばらくホールで話しをしていると、ギルドの係員がホールに入って来た。
申請の完了を伝えに来たのだ。
「アマ村調査の依頼を受注された方。いらっしゃいますか～」
アリアが受けた依頼である。
係員の方に行こうとアリアが立ち上がった時、同時に二人が立ち上がる。
顔を見合わせる三人。
「なんであなたが立ち上がってるのよ？」
「どーしてアンタが立ち上がんのよ！？」

「え？一緒の依頼？」

三人が疑問の声を上げる。

どうやらゴルドだけは、状況を即座に理解出来ているようだった。

第三小節：少女と少女（後書き）

いかがでしたでしょうか？
シュルツに続く新キャラクターの登場でした。
なかなか戦闘シーンに移らずアリアの活躍が有りませんが、違った活躍をしてましたので許して下さい。
これからも頑張って行きますので、よろしくお願いします。

第四小節：心の枷（かせ）（前書き）

第四話です。
読んで下さっている皆さん、本当に有り難うございます。
今回も最後まで、アリアにお付き合い下さいませ。

第四小節：心の枷（かせ）

受注した依頼が重なってしまった三人は、とりあえずカウンターに向かう事にした。
基本的に一つの依頼を受ける事が出来るのは、一つのチームだけである。
これは、報酬などの問題による争いを防ぐ為でもある為、傭兵達の間でも比較的に守られている規定である。
もっとも、『基本的に』なので必ずしも守られているという訳（わけ）では無い。
依頼を受けた傭兵自身が、戦力等の理由から他の傭兵を雇うという事も有る。
その他にも、正式に複数のチームで一つの依頼を受ける事も有るのだが。
ともかく、そういった規定が有る為、三人はギルドの係員と話し合いをしなければならなくなったので有る。

三人はギルドの係員に連れられて依頼係の室内に入って行くと、そのまま奥の応接室へと通された。
部屋のレイアウトは、二階の現置係に有った応接室とほとんど同じである。
三人が楽に座れそうなソファーが、向かい合わせに二つ。
その間に膝ぐらいの高さのテーブル。
部屋の奥には木製の立派なデスクが有る。
三人はソファーに並んで座り、正面に座った係員と話し合いをしている。
もっとも、

「わたしの方が先に申請し終わってたんだから、この依頼はわたし

のモノに決まってるでしょ！！」

とか

「ジュース奢(おご)ってあげたんだから、依頼は譲りなさいよ！！」

とか言い合っているのが、『話し合い』と言えるならばという但し書きを付け足さなければならないだろうが。

因(ちな)みに、先程飲み物を奢ったのは『ゴルド』なのだが……。

ともかく、部屋の中の半数が否建設的な話し合いを、残りの半数がオロオロしている時、誰かが応接室に入ってきた。

「よ～ぉ。みんな楽しそ～だねぇ」

と、部屋に入ってきた眼帯の男が声をかける。

ギルドの係員の女性は男に向かって「課長～」と、目に涙を浮かべながら助けを求めている。

一方、言い争いをしていた二人は

「シュルツ！！あなた、どうしてあの依頼をわたしに取って置かないのよ！！」

「シュルツさ～ん。ヒドいんですよ。アリアがね、アリアがね」

とシュルツに詰め寄る（？）。

リディアの普段と違った態度に、ゴルドは一人でひっそりと落ち込んでいるのだが、残念な事にこの部屋には彼を気にしている余裕の有る人間は居なかった。

「おいおい。二人いっぺんに話しかけられても、わからんよ」

そう言いながら、シュルツは係員の横に座る。

「まぁ、大体の事情は聞いて来たから解ってるけどな」

煙草に火を点けながらシュルツは話しを進めるが、すぐにアリアに取り上げられてしまう。

「ちょっと、女の子の前で煙草なんて吸わないでよね」

そう言うと、アリアはテーブルの上に置いてあった灰皿で火を消してしまった。

仕方無く、シュルツは火の点いていない煙草を寂しそうにくわえながら、話しを続ける事にした。

「とにかく。俺は係が違うんだから、お前の為に依頼を取っておくなんて出来るワケ無いだろぉ？」

「でも～」

「まあまあ。俺が取って置きの『解決方法』を持ってきてやったんだからさぁ」

そう言うと、シュルツは制服の内ポケットから一枚の書類を取り出した。

三人は書類の内容を見ると

「……シュルツさん…、これって…」

「冗談じゃ無いわよっ！！こんな…、共同受注なんてっ！！！」

シュルツが持ってきた解決方法と言うのは、ギルドが公認で複数の傭兵に一つの依頼を受注させる『共同受注』と言うものだった。

「なぁ、アリア。この依頼は、やっぱお前さん一人じゃキツいぜ」
「でも…、わたしは…」
アリアにだって、シュルツの言っている事は解っている。
自分を本当に心配してくれている事も解っているつもりだ。
しかし、これは自分の問題だという思いがある。
『魔法陣』や『異人』の関係している事件だけは…。
そんな思いに捕らわれてアリアが悩んでいると、リディアが声をかけてきた。
「そんなに悩むコトじゃ無いでしょ？誰がどうやって解決しようと、結果的に村が助かればそれで良いじゃない」
その言葉に、自分がワガママを言っているだけだという事に気がつき、アリアは急に恥ずかしくなった。
「けど、助けるってのは？一応『調査』って事になってるんだけどな～」
とシュルツが聞くと、リディアは拗ねたように「二人で深刻そうに話しておいて、なに言ってるんですか」と答えていた。
アリアは、リディアの顔を見ると
「あなたって、時々スゴいわね」
と言って、右手を差し出した。
恥ずかしそうに、そっぽを向いたリディアは「当たり前じゃない」と呟くと、アリアの手を握る。
「じゃ、そ～ゆ～事で。よろしく頼むわ」

シュルツは二人が『共同受注』を承諾(しょうだく)したのを確認すると、応接室から出て行った。

次の日、アルマダから一台の馬車が出て行く。
目指すはアマ村。
戦場は、すぐそこだった。

第四小節：心の枷（かせ）（後書き）

第四話いかがでしたか？
やっとアリア達が出発してくれました。
なかなか戦闘シーンに入らないので、『残酷な描写……』って警告は必要無いんじゃないか？とも思いますが、アマに着けばアリア達が暴れまわってくれると思いますので、戦う女の子が好きな方はもう少しお待ち下さいませ。
それでは、第五小節でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7903g/

戦場のアリア

2010年10月16日13時54分発行